
鳴ノ海の物語

プラスイオン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

鳴ノ海の物語

【Nコード】

N8632Y

【作者名】

プラスイオン

【あらすじ】

雪国シギアの農村で暮らす少女ミヤは、ある日畑で、根雪に残る小さな獣の足跡をみつけた。足跡を追って山のなかへ入っていくと、そこにはいつも祖父から立ち寄るなど言われていたく鳴滝川>があった。ミヤが川で遊んでいると、一人の少年があらわれた。その少年は、ミヤの亡き母のことを知っているようで……。

一方シギアの王都では、戦を終えて新しい時代「拓きの時」が始まるうとしていた。<舟渡り>の能力をもつ皇子センリは、妹の誕生式典で、観衆のなかに信じられない光景を目にする。

これは、それから十年が経ったシギアに伝わるく鳴ノ海くにまつ
わる物語――。

序章 ナリノカミ

序章 ナリノカミ

テルサの山々が眠るころ、レーネの子どもたちは蜜色のやわらかな陽ざしを受けながら、白く染めあがった村を駆けまわる。皆どこからか雪をかきあつめてきては、村の広場に山のように積みあげ、小さな手で丁寧押し固めていく。

やがていくつかの大きな雪山ができあがると、子どもたちは何人かに分かれ、鼻や頬を赤らめながら、大人が数人入れるような穴を掘っていき、最後には見事な雪洞をつくりあげる。

息を切らしながらやってきた子どもたちに雪洞の完成を告げられた大人たちは、藁を持ちより、それをできあがったばかりの雪室の屋根にそっとかぶせていく。そして鳥の巣のように乗せられた藁のうえには、女たちが朝からこしらえたたくさんの菓子や料理が、子どもたちの鋭い視線を受けながら、酒と一緒に乗せられていく。

昼にはご馳走を持ち寄り、日が暮れるまで男たちは酒を飲み、女たちはたわいのない話をする。

子どもたちもご馳走を食べたり、雪玉を投げあつたりして冬の短い一日を過ごす。

やがて日が沈み空が薄闇に包まれると、雪洞には火が灯され、雪深い村は月の下で淡い光を放ちだす。

夕食を終えた子どもたちは再び村の広場に集まり、ハイの木でできた拍子木を打ちながら ナリノ唄 をうたい、村中の田や畑を練り歩く。

——これは雪国シギアの、のどかな農村に古くから伝わる祭り事だ。

小正月のその日、三才になったトビもようやくミヤの許しを得て、

村の子どもたちと一緒にになり、雪洞づくりに汗をながしていた。

トビは去年までは、自分より背の高い子どもたちが協力し合って雪洞をつくりあげていくのを、ミヤの隣で目を光らせながら見ていた。

やんちゃな男の子たちが仕事を放りだし、雪玉をつくって投げあいはじめると、トビの手はいつも、ミヤの手から必至に離れようとした。

ところが、雪玉を投げあっていた子どもたちが大人たちに注意されると、離れようとしていたトビの手はとたんにおとなしくなり、ミヤの手を握り返してきた。

そんなとき、ミヤは心の底から我が子を愛おしく思った。いつかはトビも、大人たちに注意されようが、そんなことも気にせずはしやぎまわっているようになるのかと思うと、そんなすがたを待ち遠しく思う一方、ずっとこのままでいてほしいと思うのだった。

「ちゃんと、お隣のシーヤちゃんの言うことを聞くのよ。それから、危ないから川へは近づかないでね」

いまにも外へ飛びだしそうな小さな背にむかって、ミヤが言った。するとトビは振りかえり、ミヤの不安そうな目を見てにつこり微笑むと、行ってきましたと言いながら、踵をかえして外にでた。

トビが開け放った戸のむこうから、温かな光がさしこみ、ミヤを包んだ。

(ギン……)

ふいに、全身になつかしい温もりを感じ、ミヤはそつと目をとじた。瞼の裏で、一人の少年がぼんやりとすがたを現わした。透き通るようなその瞳は、つよい光をたたえている。

(あのとき、わたしがちゃんとあなたの言葉を受けいれていれば……)

ミヤは、大きく息をついた。ふっと、白い靄が広がった。

(あのとき、あの瞬間に戻れたなら……)

そう思いつづけ、もう十年が経つ。

耳をすませば、遠い彼方から笛のように高く細い音が、野山を越えて響いてくる気がした。とても切なく、哀歌にも聞こえるその音が――。

一 ミヤとギン

一 ミヤとギン

雪解け水が野山を潤しはじめた長い冬の終わり、ミヤは畑のそばの根雪に残る、小さな獣の足跡をみつけた。まだ開きかけの、ユリの蕾の形をした細くて長い足跡だった。

「それは、ソフ（ウサギ）の足跡だな」

小さな足跡を、目を凝らしてじつと見つめていたミヤのうしろから、日に焼けてしわだらけの顔が覗かせた。

ミヤは目を輝かせて、オウキのほうを振りかえった。

「この足跡をたどったら、ソフに会える？」

オウキは顎をなでながら少し考えると、しわがれた声で言った。

「そうだな……会えるかもしれないな」

その言葉を聞いて、ミヤは手に持っていた農具を放りだした。そしてオウキにすぐもどると一言告げると、足跡が伸びていく山のなかへと入って行った。

足跡をたどりしばらく山のなかへ入っていったとき、ミヤは足を止めた。

（ない……）

ミヤが追っていた小さな足跡は、根雪とともに途切れてしまい、辺りを探してもどこにも見当たらなくなってしまっていた。

そこで呆然と立ちつくし、辺りを見まわしていると、山の奥からかすかに水の流れる音が聞こえてきた。いつも、オウキに近寄るなと言われていた、鳴滝川なるたきがわのあるほうからだった。

（わたし、もう十才だもの。川遊びだって平気よ）

ミヤは心のなかでそう言い訳すると、何かに導かれるかのように、鳴滝川のほうへ歩きだした。一步一步ゆっくりと進んでいくと、次

第にその音は大きくなり、やがてミヤの目の前に昼さがりの陽を浴びて光りながら、うねるように流れる水面がすがたを現わした。

（これが、鳴滝川）

思っていたよりも浅く緩やかに流れるその川を見て、ミヤはにと笑みをうかべた。そして靴を脱ぎ、袖をまくりあげると、そつと冷たい水のなかに足を入れた。透き通った水が、ミヤの日に焼けた細い足をなでて次から次へと流れていく。足を動かせば、小さな魚が底に沈む小石の陰からすつとでてきて、また見えなくなった。

「これ、きみの靴？」

時間が経つのも忘れて小石を踏みながら川をのぼっていたとき、ふいにうしろから声がしてミヤは振りかえった。草が生い茂る川岸に、濡れた白い靴を持った少年が、こつちを見て立っていた。

「あ、わたしの靴！」

ミヤは少年の持つている靴を見て、ぱつと頬を赤らめた。その濡れた靴は、たしかにミヤのものだった。

「いいよ、ゆっくりで。走ると危ないから」

いそいで駆けよるミヤに、少年は穏やかな声で言った。

靴をうけとつて礼を言つと、ミヤは少年に気づかれないように小さくため息をついた。

（流されたのかな、ずぶ濡れだ……）

そんなことを考えながら、うつむいたままぼんやりしていると、少年が言った。

「川遊びは好き？ その靴が乾くまで、一緒に遊ぼうよ」

ミヤはそれを聞いて、一瞬オウキの顔が頭にうかんだが、（ちよつとだけ、靴が乾くまでだけ）

と、また心のなかで言い訳をすると、少年にむかつて笑顔でうなずいた。

「わたしはミヤっていうの。あなたは？」

濡れた靴を持って川をのぼりながら、ミヤは横で並んで歩く少年に言った。

「いい名前だね、ぼくはギン」

慣れない褒め言葉にミヤは照れ笑いをうかべながら、ギンの瞳を見つめた。この川の水のように透き通り、陽の光をうけて輝いている。自分よりも少し背が高く、細い手足は雪のように白い。見るからに、身体は弱そうである。「わたし、毎日おじいちゃんの畑仕事を手伝っているから、こんなに黒くなっちゃった」

ミヤがぺろつと舌をだしてそう言つと、ギンは目尻にしわをうかべて笑った。小柄で、しわをうかべて太陽のようにやさしく笑う顔は、オウキそっくりだ。

ミヤがオウキやソフの足跡の話をしながら、しばらく川をのぼっていくと、ふとギンが静かな声でつぶやいた。

「ここをもう少しいくと、滝壺があるんだ。滝壺は危ないから、そろそろ引き返そう」

急に、川上のほうを見つめながらそう言つので、ミヤは口をとがらせた。

「ギンは、おじいちゃんと同じようなことを言うのね。大丈夫よ、少しなら。わたし、もう十才だもの。ギンも行つたことあるんでしよう？ わたしも見たいわ、滝壺」

ミヤがそう言つと、ギンは今度は足を止めて、まっすぐとミヤの目を見て、

「だめだよ、危ないんだ」

と表情のない顔をして言ってきた。

ミヤはギンから目をそらし川上のほうに目をやると、遠くのほうから聞こえてくる水がどつと落ちる音に耳を澄ました。そうやってしばらく黙って水の音を聞いてから、渋々、

「わかつたわ、行かない」

と膨れた顔をして言った。きつと、自分が何を言つても、ギンの答えは変わらないだろうと思ったからだ。

機嫌を損ねるとつい早足になってしまふミヤは、何度も滑って転びそうになってしまった。そしてそのたびに、うしろを歩いていたギンに身体をささえてもらい、助けてもらった。ミヤの顔は転びそうになるたびに恥ずかしさで赤くなり、気がついたころには、ギンと目を合わせられなくなってしまうていた。

「こんなところまで送ってくれて、ありがとう」

ギンのうしろで夕日に照らされて黄色く光っている山を見ながら、ミヤは言った。

「きみのおじいさん、ずっと心配して待っていたみたいだね」

（え？）

ギンの言葉を聞いてうしろを振りかえると、畑の隅で座っているオウキのすがたが、遠くに小さく見えた。オウキはずっと、なかなか帰って来ないミヤを待っていたようだ。

「もう、さきに帰っていていいのに。おじいちゃんたら」

ミヤがそんなことを言っていると、オウキはミヤに気づいたのか、手を高くあげて大きく振ってきた。それを見て、ミヤもあきれ顔をうかべながらも、手を振りかえした。

「ギンは、一人で大丈夫？ 暗くなると危ないでしょう？ おじいちゃんに頼んで、一緒に送ってあげる」

ミヤが振りかえってそう言っていると、ギンはにっこり笑って首をふつた。

「大丈夫だよ。それより早く、おじいさんのところへ行ってあげてよ」

夕日に照らされて、ギンの顔も山のように黄色く輝いている。ミヤはすこし戸惑ったが、ギンがオウキのほうを気にかけていたので少し待っていて、と言うと、いそいでオウキのほうへ駆けだした。

歩きなれた山道をくだっていくと、だんだんと小さくぼやけていたオウキの顔は、はつきりと見えてきた。疲れを隠しなげうつと顔をほころばせて、こっちを見ている。

「ごめんなさい。足跡が遠くまでつづいていたから、遅くなつてしまったの」

ミヤはオウキのもとへ着くと、まず言い訳をした。それから、「男の子と会つたの」

と言うと、来た道を振りかえつた。

「そうかい、それはよかった。なかなか帰つてこないから、心配していたんだよ」

オウキが隣でそう言っているのを聞きながら、ミヤは山のほうを見つめた。しかし、見つめた先にたしかにいたはずのギンのすがたはどこにも見えず、ミヤは目を疑つた。

(……おかしいな、もう帰つちやつたのかな)

さつきまで一緒にいたあの少年は、たちまち根雪に残つていた足跡のように、すがたを消してしまつたのだ。

けれど、横でソフは見つかつたかと聞いてくるオウキの声で、ミヤは我にかえり、首をふつて笑つた。

「ううん。でも、また今度、会えるといいな」

「ミヤはほんとうに、おかしな子だよ」

ミヤと炉を囲み、きつね色に焼かれて香ばしいにおいしているカジ(イノシシ)の肉にかじりつきながら、オウキは言った。

ミヤは冗談だと言って笑っているオウキを、きつとにらみつけた。オウキは、いつもこの言葉を口にする。だから、ミヤにはオウキが本気で自分をおかしな娘だと思つてのことくらい、もうとつくに気づいていた。

けれど、そんなオウキをにらみつけている自分でも、たしかにそう思うことはしばしばあった。自分はどこか、人とは違うということに、ふとしたことで気づかされるのだ。けれどそのたびに、きつと親ゆずりなのだと思ひこみ、それ以上深くは考えないようにしていた。

ミヤは、自分の両親の顔を知らない。物心がついたころには、す

でにこの古びた家で、オウキとふたりだけで暮らしていた。だから、ミヤはオウキを自分の親のように慕っていたので、五才の誕生日のとき、はじめて真実を告げられたときは、自分でもすぐにその話を受け入れることはできなかった。

——ミヤのほんとうのおじいちゃんは、わたしじゃないんだよ

まだ幼かった私がオウキに真剣な目をして言われた言葉が、耳の奥でこだました。それは一瞬で、愛する親から突き放されたような、そんな言葉だった。

ミヤは泣きながらオウキにしがみつき、それはどうしてかと問いかけた。するとオウキは、やはりまだ言うんじやなかった、という顔をしながらも、ミヤを落ち着かせ、ゆっくりと丁寧に話しはじめた。

朝から空を覆っていた分厚い雲が消え、ようやく雨があがった夕暮れ、畑仕事の帰りにミヤを見つけたこと。人里離れたあぜ道で毛布に包まれ、一人置き去りにされていたその乳飲児は、なぜか泣きわめいて親を呼ぶのでもなく、にこにこ笑っていたということ。それがどうしても、自分には不思議に思えて仕方がなかったということ。それで気にかかり、とりあえず連れ帰ったその日が、ちょうどいまから四年前だということ。

ただ、それでもいまは、ミヤのことはとても愛しているということ……それらすべてを、遠い目をしながら語ってくれた。

「わたしのお父さんやお母さんも、おかしな人だったのかな」

ふてくされた顔をしながら、ミヤはオウキに言った。

オウキは熱いお茶をすすり、齒にはさまった肉の筋をとろうと口をもごもごさせながら、低い声で唸った。そして首をかしげると、

「そうだなあ……」

と言葉を濁してしまった。

「でも、きょうはたしかにその男の子と、一緒に山のなかで遊んだのよ。嘘じゃないんだからね」

壁の隙間を通って入ってくる風に吹かれ、ときおり小さく揺れている炉の火を見つめながらそう言くと、ミヤは昼間会った少年を思い出した。風に揺れてさらりと流れる黒髪、透き通り輝く瞳に、目尻にしわをうかべてやさしく笑う顔。落ち着いた声、白く細い手足……。まるで、ギンは川のようにだった。太陽のように笑うのだけれど、ずっと冷静で、まっすぐ川上を見あげていたその背には、なぜか冷たいものも感じた。けれど、名前しか聞いていなくて、年も家がどこかにもわからない少年ではあったけど、またいつかどこかで会えるような気がして、ミヤは会えるその日が楽しみになっていった。

（今度は、なにを話そう）

そんなことを考えながら、ミヤは寢床についた。するとすぐに、すやすやと深い眠りに吸い込まれていった。

翌朝、ミヤは、雨が激しく地を打ちつける音で目をさました。

オウキがたてつけの悪い重たい戸を開け、降りしきる雨を見つめながら、田畑を心配している声が聞こえてきた。

天気の良い日はもちろん、少しの雨でも外へ出て、日が暮れるまで田畑にいるオウキは、このような天気の日はずっと薄暗い家のなかでじっとしている。お茶をすすったり、農具を磨いたり、ときには一日中寢床で横になっていることもあり、見ていてとても退屈そうだった。

晴れていれば時々このどかな農村の家々を、一軒一軒問診にやってくる医者たちも、きょうのような雨の日には訪れない。子どもも外で遊べないから、雨の音だけが延々と聞こえてくる。きょうのレーネの人々は、静かに一日を終えそうだった。

ところが、ミヤは違った。ミヤは寢床から跳ね起き、壁に掛けてあった蓑を頭からかぶると、一目散に冷たい雨の降る外へ飛びだした。

ミヤは、夢を見た。双子池で、まだ子どものソフが溺れる夢だった。

た。

（あの池は、たぶん濁り池のほうだ）

泥を跳ねながら、ミヤは夢中で村の外れのほうへと駆けていった。長い坂をくだり、滑って転んではまた立ちあがり、息を切らしながらひたすら走った。

少し雨が弱まったとき、濁り池と七色の池が並ぶ、双子池へとたどりついた。どちらの池も水かさが増し、土色に濁っていた。

ゆっくりと濁り池のほうへ行くと、土色の池のそばに、白くて丸いなかがうずくまっているのが目に映った。

（ソフだ……よかった、間に合った）

ミヤは足元に落ちていた太くて長い木の棒を手にとり、足音をたてて気づかれないように、そっとソフのほうに歩み寄った。

しかしその刹那、目の前は突然真っ白になり、直後に大地を揺るがすような大きな音が、大気に轟いた。

（あ、だめ……！）

激しい音に跳びあがったソフは跳ねあがり、そのまま水しぶきをあげ、濁り池のなかへと滑り落ちてしまった。

ミヤはいそいで水のなかでもがいているソフを助けようと、草を踏み倒して前へ進みでた。しかしそのとき、濡れてやわらかくなつた草はミヤの重みで深く沈み、足元は一気に崩れてしまった。視界が揺れ、身体が浮くのを感じ、ミヤは高い悲鳴をあげた。そしてそのまま、一気に池のなかへと吸い込まれていき、口のなかには細かい草の混じった泥水が、容赦なく流れ込んできた。

（おじいちゃん、助けて）

遠のいていく意識のなかで、ミヤは必死にオウキの名を呼んだ。やがて視界は真っ暗になり、ミヤは冷たい水のなかで、意識を失ってしまった。

ミヤが意識をもどしたのは、夕焼け空の下に広がる、静かな森のなかだった。あの大雨は嘘のようにあがり、朱く染まりだした空に

は雲ひとつなかった。

ミヤはゆっくりと起きあがり、目をこすりながら辺りを見まわした。すると、遠くのほうから誰かが自分の名を呼んでいるのが聞こえてきた。

（おじいちゃんだ）

ミヤはすぐに立ちあがり、なつかしく聞きなれたその声のするほうへと走りだした。

森をぬけると、そこは、いつもオウキとミヤが一生懸命手入れをしている畑が遠くに見える、ギンがすがたを消したあの場所だった。あのときと同じように、オウキは畑にいて、ミヤに気がついて手をふっている。

ミヤはそれを見て乾いた蓑を脱ぐと、オウキにむかって大きく手をふりかえした。

（もしかしたら、ギンが助けてくれたのかもしれない）

心の底で、ミヤはふと思った。なぜかはわからないけれど、そんな気がしたのだ。

（ソフは、大丈夫だっただろうか……）

うしろを振りかえると、青く茂る山々は夕日を浴びて、また黄色に輝きだしていた。濡れた土のおいは、たしかに雨が降った後の、あのおいだった。

夢ではない。ミヤは、そう思った。

たしかに、濁り池へ行き、池に落ちるソフを見た。そして、そのソフを助けようとして、自分も池に落ち、そのまま意識を失ってしまった。その出来事はすべて、さっきまであった出来事なのだ。

（ありがとう）

ミヤは自分を救ってくれた、正体のわからない何かに、礼を言った。

そして踵をかえすと、背伸びをしながら、ずっとこっちを見て待っているオウキのもとへ駆けだした。

二 秘密

二 秘密

「皇子、ミカリでございます」

セナリが書物を読んでいたとき、背後のふすまの向こうからなつかしい声がしてきて、セナリは顔をあげた。ミカリと聞いて、おかっぱ頭の少女を思いうかべながら、ふすまの向こうにいるその声の主に言った。

「よい」

するとふすまはゆっくりと開き、長い金色の髪をうしろで一つに束ねた少女が、軽く一礼をして部屋の中に入ってきた。ぴんと背筋を張ったまま静かに歩み寄ってきて、セナリのまえで正座した。落ち着いたその仕草は、セナリの知っているミカリではなかった。

「長く見ないうちに、変わったのではないか」

ミカリが腰をおろすのを見届けると、セナリは苦笑をうかべながら言った。

「貴方さまとは、もう六年お会いしていませんでしたからね」

（六年……）

セナリにとって、ミカリと兄妹のように遊んでいた日々はつい昨日のことのようだった。けれど、いまのミカリを目にすると、やはりそうでもないらしい。ミカリは自分の知らない六年という月日のなかで、随分と変わってしまったようだ。

久々に見る少女の顔を見ながらそんなことを考えていると、セナリが手にしていた書物に気づいて、ミカリが言ってきた。

「それは……？」

セナリは書物に目を落とすと、表を見せながら言った。

「これは、シギアの風俗史だよ。一応、皇子だからね。この国のことを学んでいるんだ」

ミカリがかすかに笑った気がした。

「きょうは、なぜここに？」

センリがそう言っていると、ミカリは軽く咳払いをした。そして、深く頭を下げながら、

「イナさまのご誕生を伺って、お祝いのごあいさつに参りました」と言った。

そんなミカリを見て、センリはすこし沈黙をおくと、

「ミカリ、どうしてそのような言葉をつかうのだ？ ……むかしは、そんなふうではなかったのに」

と眉間にしわをうかべながら言った。

するとミカリは驚いたのか、目を丸くしてこっちを見てきた。

「だって、もう十四ですから。いつまでもむかしのままでは……」

胸に寂しさに似たものを感じながら、センリはミカリを見つめた。

そんなセンリを見て、ミカリは、今度は声をだして笑った。

「センちゃんは、なにも変わってないのね。わかった、ふたりだけのときは、こうしてむかしのように話すわ。それでいいかしら？」

皇子」

ずっと仮面をかぶっていたかのようにだったミカリの顔が、一瞬で、幼くて意地悪だったなつかしい少女の顔にもどり、センリは大きく息を吐いた。

「皇子をばかにするな」

肩の荷をおろし、緊張が解けたようにまだ笑いつづけているミカリに、咳払いをして言った。

そしてミカリも気を取りなおすと、用意していたのか、センリが顔を赤らめているのも気にせず話しはじめた。

「実はね、話があるの。テルサのことなのだけど」

テルサとは、シギアの西部に位置し、ここ数年で急成長をとげている、鳴滝川河畔に栄える都市のことだ。シギアではそのテルサ街を中心とする西部一帯を、テルサ地方と呼んでいる。シギアを中心に位置する王都とのあいだに連なるテルサ連邦の影響もあり、冬場

は王都よりも雪深い。

「テルサがどうかしたのか？」

ミカリは、特にテルサと縁があるわけでもない。なぜ突然その名がでたのか、センリには想像できなかった。

ミカリは、にっと笑って言った。

「気にならない？ どうしてあの雪深いテルサが、ここ数年で成長してきているのか」

センリは思った。たしかに、これから父の跡を継ぎ、国を引っ張っていかねばならない我が身の立場を考えると、知っていて損はない。テルサのように河畔にあり、そこそこ栄えている都市は他にもある。それも、テルサはもちろん、王都よりも雪の少ない地域だ。

「それなら、まずは父上に」

「だめよ」

センリの言葉を遮るように、ミカリが言った。

「帝には頼らないで、あなたが自分で調べるのよ」

大人びた目をして、ミカリはまっすぐセンリの目を見ながらつぶけた。

「いい？ あなたには“あの技”があるじゃない」

（え？）

センリは口を開けたまま、しばらく考えてから言った。

「テルサへ、わたしが？」

ミカリは大きくうなずいた。

（“あの技”を……）

センリはわずかにためらった。しかし書物を脇に置くと、ミカリを見て小さくうなずいた。

「わかった、少しだけなら」

テルサの中心地——テルサ街は、父の話や噂通り、たしかにむかしに比べて、建物の数や通りを歩いている人の数が多くなっている

気がした。といつても、最後にセンリがこのあたりへ来たのは、もう六年ほどまえのことになるのだけど……。

センリはしばらく街の周辺のようにすを上から眺めていたが、当然ミカリがぶつけてきた疑問を解決する手掛かりはつかめず、気がつく、西の空からはどんよりと重たそうな黒い雲が、風に乗ってこちへ向かってくるのが見えた。

（雷がきたら、このままでは危ない）

センリはそう思い、森のなかにちらりと見えた白くて小さいものを目掛けて一気に降りていった。

上から見えた水たまりにむかって歩いてみると、冷たい雨が降りだしてきた。はじめは弱かった雨も次第に強まり、センリの視界を霞めた。

ミカリとのが頭から離れ、久々の自由な時間を満喫しはじめていたところ、センリは大きな水たまりにたどりついた。そばの草かげには、藁の塊のようなものも見えた。

（人？）

その瞬間、センリはよく宮に贈られてくる貢物のなかに、獣の毛皮があつたことを思いだした。

（狙っているのか……）

センリは唾を飲み込むと、自分を見つめている藁の塊に意識を集中させた。

そのとき、視界が真っ白に染まり、とてつもなく大きな音が腹に響いた。センリは驚きのあまり、一歩まえに飛び跳ね、そのまま水たまりのなかへと吸い込まれてしまった。

センリが短い手足を必死に動かしてもがいていると、さっきまでじつと自分を見ていた藁の塊が、こちへ向かって飛び出してきたのが見えた。ちらりと見えた少女の目は、まっすぐセンリのほうを向いていた。

けれどその少女も足場を崩し、深い水のなかへと悲鳴をあげなが

ら落ちてしまった。そしてつかの間、センリは少女のほうから襲ってきた波にのまれてしまい、目を閉じた。

押入れのなかで急にうなされだしたセンリを見て、ミカリはすと血の気が引いていくのをおぼえた。

「センちゃん、どうしたの！」

大きな声をだすと、廊下に立っている見張りの者に気づかれてしまったと思ったミカリは、センリの耳元で何度も名前を呼んだ。

（早く、もどってきて……）

壺の底のように暗い闇のなかで、センリはおかっぱ頭のミカリのすがたを見ていた。それは、彼女が宮に顔を見せなくなりだすまえの、あの頃のすがただった――。

□

白く塗られた窓枠に、一羽の鳥が降り立った。その鳥は、金色の鋭い瞳で部屋のなかを見渡すと、人影がないことを確認し、そっと部屋のなかに細い足を踏み入れた。

真夏の暑い陽ざしが差し込み汗がにじんでくるなか、そのときをずっと押入れのなかで待っていたミカリは、こっそり白い歯をだして笑みをうかべた。

「センちゃんみつけ！」

押入れから飛びだし、喉の奥が見えるくらいに口を開いて声を張りあげているミカリを見て、センリは両手を上下にいそがしく動かして驚いた。

（ミカリ……！）

金色のおかっぱ頭をした少女の瞳は、まっすぐと自分を捉えている。

「早くしないと、お父様きちゃうわよ」

なめるように見てくるミカリをまえに、センの目は戸惑いの色
を隠せなかった。そして、しばらくミカリとにらみあいをしてい
たが、廊下を早足にこちらへむかつてくる音に気づくと、とうとうセ
ンは“あの技”をつかった。

みるみるセンの魂が離れていくと、その鳥は本来の赤い瞳をと
りもどし、ミカリのまえで一目散に窓から飛びだしていった。

桃色の鳥が青い空にひとつの点となって消えていったとき、ふす
まのむこうから乳母の声が聞こえてきた。

「セさんさま、スミでございます。間もなく婚儀のお支度を始めら
れないと……」

「わかつておる、入れ」

セさんがそう言うのと、ゆっくりとふすまが開き、ふくよかなスミ
の顔が現れた。

スミは一礼をすると、セさんに目をやり、すぐさま目を丸くして
言った。

「まあ、セさんさま！ どうしてそのように汗だくで！」

スミはうしろで正座していた若い娘に小言でなにかを伝えると、
用意していた布で、セさんの顔にうかぶ汗を慣れた手つきで手早く
拭きはじめた。

「一体、なにをして遊んでいらしたのですか？ こんなに汗だくに
なるまで！」

呆れた顔をして言うスミに、セさんは無言なままでいた。ちらつ
とスミのうしろに目をやると、ミカリがおもしろそうに自分を見て
いるのが見えた。

しばらくして、スミに小言でなにかを言われていた娘が、お湯を
張った桶をもってやってきた。娘は布をお湯につけて硬く絞ると、
スミよりも丁寧にやさしく、汗のにじんだセさんの身体を拭きはじ
めた。

そのとき、ミカリがにやにやとこっちを見ながら言った。

「セさんちゃん、もうお兄さまになるのだから、もう少ししっかりし

ないよね！」

セナリは顔を赤らめると、ぷいっとミカリから目を反らした。

（嫌だな、ミカリは）

この宮のなかで、セナリになんでも言いたいことを言える人間は、極わずかである。父であるシギアの皇帝ナイルをはじめ、父がもつとも信頼しているヤンダン武将……。それから、乳母のスミと、なぜか、最年少で幼なじみのミカリだ。

ミカリはヤンダンの孫娘で、よく話す気の強い少女だ。父がヤンダンをすごく慕っているから、ミカリは唯一、宮のなかを自由に入りできる皇族以外の子どもだ。

ミカリは、怒るとすごく恐い。耳の奥が突き抜けてしまうのではないかと思うくらいに、大きな声で延々と泣きわめく。そして最後は、ミカリが悪くても、いつも、男の子なのだから女の子を泣かせるな、と僕がスミや父に説教されるのだ。

けれど、そんなときでも唯一味方をしてくれるのが、ミカリの祖父・ヤンダンだった。ヤンダンにはミカリが悪くても悪くなくても、父や僕に頭をさげてくれる。好きなお菓子や遊具もくれる。とてもやさしくて、シギアで一番つよい武人だった。

（おじいさんはあんなにやさしいのに、なぜミカリは……）

セナリは、まだスミの陰でこつちを見てにやにやしているミカリを横目に、心のなかでつぶやいた。

全身の汗を拭ってもらってすっきりすると、今度はいいよ、婚儀に出席するための衣を着せられはじめた。純白でとてもきれいだけれど、肩のあたりが重たくて動きにくい。

身支度を整えながら、僕は何度も、

「式のときは、きちんとお父さまとお母さまのうしろをゆっくりとついていくのよ」

とスミに言われた。

そして、そうするとまた、ミカリがスミのうしろから、
「よかったわね、センちゃんにもついにお母さまができるのね！」
と余計なことを言ってきた。

センリの父は、きょうで二回目の結婚だった。宮の召使いだった、ケイネルという一般の出の女人との結婚だ。

一度目の相手は、センリの母だった。けれどセンリの母は、センリを産んだときに死んでしまい、二度と帰らぬ人となった。

だから、センリは母の顔は、肖像でしか見たことがない。どんな声をしていて、どんなふうにあう人だったのか、全くわからない。父やヤンダン、スミが言う、明るく、気さくで真のつよい女性だった、という言葉だけを頼りに、その面影を想像するしかなかった。

準備が整うと、センリはスミに、父と新しい母の待つ、宮の一番奥の間へと導かれていった。

（ミカリに話しておきたいことがあったのに……）

“あの技”をミカリに目撃されてしまったから、センリは気になって仕方がなかった。

（どうして、シギチヨウがぼくだって、すぐにわかってしまったんだろう）

もしかしたら、とつくにミカリは気づいていたのかもしれない。毎日暇を見つけては、だれにも見つからないように押入れのなかに隠れ、自分の身体を置いて、鳥や獣になって空や野山を駆けていたことを……。

センリの魂は、いつもはこの シギアの皇子 の身体に宿っている。けれどそれが、まだ八才の自分には全然おもしろくなくて、大嫌いだった。ほんとうは、こんな一日中宮のなかから出られない不自由な身体に入っているということは、ほんのひと時でも避けたかった。

センリにとって、人の身体も獣の身体も、肉体は皆、魂の乗り舟

でしかなかった。空を飛びたいときには、皇子の身体を乗り捨て鳥になるし、野山を駆ければ、獣になって、思いきり森のなかを走りまわった。まるで、舟を自由に乗り換えるかのように、肉体という舟を渡り歩いた。

いつしか、センリはこの生まれながらの不思議な能力を 舟渡りと自分で名付けた。そして他の人には見つからないように注意をしながら、こっそりとつかってきた。

そう、こっそりと、慎重につかっていたはずだったのに……。

ミカリに早く口止めをしておかなければ、とそんなことばかり考えていたら、婚儀はあつという間に終わった。

宮のまわりには大勢の観衆が集まり、広場は人で埋め尽くされた。センリの父ナイルは、先代の帝よりもはるかに人気を集めていた。このことについて、スミはいつも言っていた。

「ナイルさまは、この国の偉い人と、そうでない人の区別をなくされたのです。ケイネルだって、いままでならどんなにナイルさまのことが好きでも、ナイルさまと結婚なんてあり得なかったのですよ。皇子も、帝を見習ってくださいね」

たしかに、父が帝になってからは、シギアの人たちの暮らしは間違えるように豊かになったと聞く。戦を終えたこともあるのかもしれないが、観衆の人々もセンリには皆生き生きとしているように見えた。

そんな父を、センリはもちろん、とても誇りに思っていた。自分もいつかは、父のような立派な帝になりたいと願っていた。

（でも）

最近、複雑なのが正直な気持ちだった。特に、舟渡りをしたときなんかは、つよくそう思った。

（父上は、気づいているだろうか）

婚儀のあとの宴で、幸せそうにケイネルと見つめあって笑っている父のすがたを見て、センリは思った。

そのとき、うしろから肩を突かれて、セナリはうしろを振りかえった。普段よりも鮮やかな色の衣をまとい、髪に花飾りをつけたミナリが立っていた。

「ねえ、赤ん坊はいつ生まれるのかしら」

ミナリはちらちらと父のほうを見ながら、にこにこして言った。

「知らないよ。ぼくに聞かないでくれ」

セナリはぶすつとした顔で言うと、はっとあることを思いだし、ミナリに言った。

「ミナリ、さっきのことなんだけど。あれ、絶対にだれにも言うなよ」

ミナリは一瞬とぼけた顔を見ると、妙にお姉さんぶって言った。

「……仕方ないわね、センちゃんがそう言うなら。二人だけの秘密ね！」

□

ミナリの声に呼ばれてセナリが目をさますと、青ざめた顔で自分を見つめている少女の顔が、目にうつった。

「センちゃん……！」

ミナリはほつと息をつくとき、額にうかんでいた汗をぬぐった。

セナリは重たい身体を起こして、心配そうに自分を見ているミナリに言った。

「池に落ちたんだ。はつとしたよ。もう終わりかと思った」

ミナリは一瞬口元を固く結んだが、ふつと息をだして笑った。

「まぬけな皇子ね」

セナリは頬を赤らめて、ミナリをにらみつけた。

「だれにも言うなよ」

「二人だけの秘密ね」

あのとときと同じ顔をしてそう言うミナリを見て、セナリも声をだしてミナリと笑いあった。

三 滝壺（前書き）

三 滝壺

三 滝壺

夏祭りをひかえたある日の昼下がり、ミヤはお祭りにつかう笛を持って、あの山へと入っていった。

はじめてギンに会ったときはまだたくさん残っていた雪も、いまはもう融けてしまつてどこにも見あたらなかった。山のなかには静寂を保ち、ときおり吹きつける心地よい風が、生い茂る夏草やミヤの頬をなでた。地面にはたくさんの枝や葉が落ちていて、布団のようにふかふかとしている。

鳴滝川につくと、ミヤはしばらく川上にむかつて岸を歩いていった。川はきょうも、陽ざしを浴びて光りながら、うねるように流れている。

ミヤは立ち止まり、大きく息を吸った。この川へ来ると、不思議と心が落ち着き、全身に力がみなぎってくる気がした。耳を澄ませば、ギンが頑なに行くのを拒んだ滝壺のあるほうから、水の落ちる音が聞こえてきた。

頭にふつと蘇ってきた濁り池のできごとを払うように首を振ると、ミヤは川上を見つめた。

（このまま川岸を歩いていけば……）

水の流れる音を聞きながら、ミヤはゆっくりと足元に気をつけながら歩きだした。

岩場をのぼっていったとき、ついに滝壺がミヤの目のまえにすがたを現わした。

激しい音をたてて流れ落ちる水は、しぶきとなって風に乗り、ミヤの乾いた衣を湿らせた。深い淵には、透き通る水が溜まっている。ミヤは角ばった大きな岩のうえに静かに腰をおろすと、衣と帯の

間に挟んでいた笛をとりだした。そして、そつと指穴に指を置き、口をあてた。

そのとき、滝壺のまわりに生い茂る木々の底から、細く高い音が響き渡り、ミヤは辺りを見回した。笛のようなその音は、長く尾を引くように鳴りつづけている。

（なんの音？）

毎日田畑へ行つて作業をしていたが、このような音を聞いたのはじめてだった。

（鳥ではない）

ミヤは思った。それなら、この音は一体なんだろう……。そう思いしばらくその音に聞き入っていると、次第に音は小さくなり、やがて聞こえなくなった。辺りは何事もなかったかのように、また滝を流れ落ちる水の音だけになった。

音が止んでからも、ミヤは森を見つめ、耳を澄ましていた。小鳥が枝から枝へと飛び移るたびに、葉がカサカサと擦れる音が聞こえてきた。

気のせいだったのだろうか。そう思ったとき、突然対岸の森の奥から、大きな破裂音が聞こえ、ミヤは身体を硬直させた。

（銃声だ）

狩人が獣でも狙っているのだろう。また一発、また一発とその音は聞こえてくる。ミヤは顔をゆがめながら、その音が鳴り止むのを待った。心を撃たれ、ぽっかり穴が開いたような哀しい気持ちがあった。

「ミヤ」

背後から名前を呼ばれて、ミヤはうしろを振りかえった。

ギンが、こっちを見て立っていた。

「ギン、どうしてここに」

ミヤが驚いてそう言つと、ギンも言った。

「それはこっちのセリフだよ。あんなに危ないつて、言つたじゃない

いか」

ギンが鋭い目で見てきたので、ミヤは戸惑って言った。

「……ごめんなさい。でも、大丈夫でしょう？ ほら」

ミヤが笑みをうかべたとき、また森の奥から、一発の銃声が聞こえてきた。

「……この辺りは、狩人がよく来るんだ。獣たちが飲み水や魚を求めて集まってくるから、そこを狙っているんだよ。行こう」

ギンは暗い目をしてそう言うと、ミヤのまえに手をだしてきた。

ミヤはなにも言わずにその手をとると、ギンのあとについて岩場をおりていった。

滝壺が遠ざかり、水の落ちる音が小さくなってきたとき、ミヤはギンに聞いた。

「もしかして、ギンが危ないって言ったのは狩人のせい？ わたしにあの銃声を聞かせたくなかったから？」

ギンはちらっとミヤの目を見たが、なにも言わずに黙ったまま歩きつづけた。

仕方がないので、ミヤは話を変えることにした。

「春に一緒に川で遊んだでしょう？ あの日の帰り、わたしのおじいちゃんを見たのを覚えてる？」

ギンはうなずいた。

「覚えてるよ」

ミヤはそれを聞いて安心すると、笑って言った。

「おじいちゃんがね、わたしのことをからかうのよ。ミヤの隣にはだれもいなかったって。おかしいでしょう？」

ギンは表情を変えずに、ずっとこっちを見ている。それを見て、ミヤはつづけた。

「よく言われるの。ミヤはおかしな子だって。

でもたしかに、時々不思議な夢を見るの。雛鳥が巣から落ちてしまったたり、獣が怪我をしたり、池から落ちたりする夢。

それで、目を覚ましてその場所へ行くと、ほんとうに雛鳥が巣から落ちていたり、獣がいまにも池のなかへ落ちそうになっているの。このまえも、それで池に落ちたソフを助けようとしたら、わたしまで落ちちゃった」

ミヤが照れながら話しているのを、ギンは静かに聞いていた。

「あと……」

そこまで言いかけて、ミヤは話すのを止めた。

オウキから聞いたまだ乳飲児だったころの話をしようかと思ったけれど、突然そんなことを言われても困るかと思い、止めた。

「わたしは、生きているかもわからない親に似ただけだと思って、全然気にしてないけどね」

ミヤは、ゆっくりと風に乗り流れていく雲を見あげた。
すると、突然ギンが言った。

「ミヤのお母さん、知ってるよ」

（え？）

ミヤは足を止めて、ギンのほうを見た。

はじめは聞き間違いかとも思ったけど、たしかにギンは、静かな声で言った。

（お母さんを知っている……？）

口を開けたまま呆然と立ち尽くしているミヤを見て、ギンも立ち止まって言った。

「お母さんの話、聞きたい？」

ミヤは、迷った。ずっと、母はどんな人だったんだろうと気になっ
てはいたけれど、いざ聞くとなると怖かった。

オウキには、気がついたころには父も母も、星になったのだと聞
かされていた。

心のなかでは、もしかしたらまだどこかで生きているかもしれな
い、と祈るように思うこともあったけれど……。なんだかんだで、
ミヤはオウキとの暮らしには満足していたし、オウキの言うとおり、
星になってしまったのだと思っていたほうが楽でもあった。

生きていたところで、置き去りにされていた私はただ嫌われて捨てられただけかもしれないし、もしそうなら、ほんとうは生まれてきてはいけなかったのだと、そんなことばかり考えてしまうからだ。ずっと黙ってこっちを見ながら、ミヤの返事を待っているギンに、ミヤは言った。

「どうして、わたしのお母さんを知ってるの？」

ギンはなにかを思いだしているかのように、すこし間を置くと言った。

「さっきの滝壺に、よく赤ん坊を背負って来ていたよ」

（赤ん坊と滝壺に？）

ギンが言つとおり、ほんとうにそれが母なら、その赤ん坊はミヤということになる。

一体、あの滝壺になにをしに行ったのだろう。自分と同じようにこの川は心が安らぐから、それで رفتたのだろうか。……というよりも、自分が川へ行って不思議と安らぐのは、そうやって小さなころに母が連れていってくれていたからなのだろうか……。

ミヤは波のように次々と押し寄せてくる疑問を、必至に整理しようとした。

「どうして、わたしのお母さんだつてわかるの？」

ギンは、なにも答えなかった。なにかを秘めているように、堅く口を閉ざしている。

「いつ、見たの？」

恐る恐る聞くと、今度は思っていたとおりの言葉がかえってきた。

「もう、九年はまえだよ」

オウキがミヤを連れ帰ったというのも、ちょうどそのくらいまえだった。

レーネのような小さな村では、村人たちは皆、どの子がこの家の子か、見ればすぐにわかる。けれどオウキの話では、ミヤがどこの子かわかる者はだれもいなかったという。

（わたしは、ほんとうはレーネの子でもない）

母は、滝壺で身を投げたとしてもいうのだろうか。赤ん坊のミヤをレーネに置き去りにして。

ミヤは大きく息を吐くと、

「いいの。わたしには、おじいちゃんがいるから」

と言って歩きだした。

するとギンも、なにも言わずにゆっくりとミヤにつづいて、歩きだした。

「ギンのお家はどこなの？」

ずっと黙って川沿いをくだっていたとき、ミヤは沈黙を破るように言った。

「滝壺の先にある村だよ」

それを聞いて、ミヤはまた足を止めた。

「ごめんなさい。なにも知らなくて……。こっちまで来たら、帰るのが大変でしょう？」

そう言うと、ギンは笑った。

「大丈夫だよ、近道があるから」

（それならいいか……）

ミヤは安心すると、手に持っていた笛を見せてにっこりして言った。

「きょうわたしが川へ来たのは、この笛を吹く練習をするためだったの。あさつて、村の夏祭りで吹くの。」

お祭りには、テルサから来た人たちが屋台もだしてくれるのよ。

夜は暗いから、来れたらでいいからギンも来て。一緒に屋台をまわりましょう」

ギンはミヤの話を聞いてうなずくと、

「わかった、行けたら行くよ」

と笑顔で言ってくれた。

「それじゃ、きょうはここで。いつも送ってもらうのは悪いから、

またね」

ミヤは手を振って、ギンとわかれた。

夏祭りのその日は、昼間は陽が照りつけていたものの、夕方にはにわか雨が降った。

ギンは、祭りには来なかった。

（やっぱり遠いし、無理だったのかな）

ミヤがそんなことを思っていたとき、一緒にいた隣の家のソジが、屋台を眺めて言った。

「そろそろ屋台は終わりだから、神社のほうで送り火がはじまるよ。行こう」

ソジは焼き菓子にかじりつきながら、神社へむかって走りだした。「ちよつとソジ、待ってよ」

ミヤも慌ててそう言っていると、ソジのあとを追った。

神社のまわりには、すでに大勢の村人たちが集まっていて、ソジやミヤに気づいた村の子どもが、こっちにむかって手を振ってきた。ミヤはソジとおしゃべりをしながら、人だかりの中心に積まれたハイの木に、火がつけられるのを待っていた。

そのとき、ソジの父・ヤソンがこっちへむかって走ってくるのが見えた。

「悪い、ソジ。うっかりして夕立ちでハイの木を濡らしてしまったよ。なかなか火がつかないから、いますぐこの桶に七池の水を汲んできてくれないか」

ソジは空の桶をうけとると、わかった、と一言返事をした。

「わたしも行く」

「いいよお前は」

そう言ったけど、さっき来た道を走ってもどりだしたソジを、ミヤも走って追いかけた。

ソジはレーネ村の村長の家の息子で、とても責任感がつよい。な

んでも任されたことは一人でやろうとする性格で、父に七池と呼ばれた七色の池にむかつて、ものすごい速さで駆けていった。

村外れなだけあって、七色の池まで来ると、お祭りでにぎわう人の声は全く聞こえなかった。辺りは薄暗く、虫の声だけがしている。灯りがないから、月の光だけが頼りだった。

「気をつけてね、落ちないでね」

やっと追いつき、すでに池の水を汲み始めていたソジにむかつて、ミヤは言った。

「手伝おうか？」

ソジは大丈夫だ、と言かえすと、池の水が入れられた桶を軽々と持って、また来た道をもどりはじめた。

「便利だよな、この池の水は」

黙って並んで歩いていると、ソジが口を開いた。

「知ってるか？ 王都のほうじゃ、まだこの水はあまり知られていないんだってさ」

「え？ そうなの？」

驚いて聞きかえしたミヤに、ソジはすこし得意げになってつづけた。

「そうだよ。テルサでも、最近になってやっと使われるようになってくらいだよ」

（この水が知られていないなんて……）

レーネ村では、七色の池の水は村人の暮らしをささえる、とても大切な資源のひとつだった。木を切らなくても、この水を使えば簡単に火は点く。池に石を投げ入れると七色の輪ができることから、村人は 七色の池 や 七池 という愛称で呼んでいた。

ミヤは、ソジが持っている桶のなかでゆらゆらと揺れている月に目をやりながら、七色の池のない暮らしを想像してみた。

（もし、この水がなかったら……）

いまの畑仕事にくわえて、毎日本を切ったり、薪を集めに山へ入らないといけないかもしれない。寒い冬に入るまえには、それこそ

たくさんの薪を蓄えなければいけない。それから……。

ミヤは考えれば考えるほど、七色の池のありがたさを感じられた。
「あのさ」

ソジが、ミヤの顔をのぞき見てきた。

「今度、一緒に王都に行かないか」

「え？ 王都に？」

ミヤは驚いてソジの顔を見た。

レーネ村から王都へ行くには、テルサ街へ行くよりも遠い。馬車で行っても、半日以上はかかる。

「今度、皇女さまの誕生式典があるそうなんだ。宮城から父さんに招待状が来たんだよ。……ちょうど、王都の暮らしも見れると思うんだけど……」

皇女さま と聞いて、ミヤは胸を躍らせた。王都へ行くのはもちろん、式典にでられるなんて、滅多にないことだ。それからソジが言う王都の暮らしというものも、興味がある。

「でも、わたしなんか一緒に行っていいの？」

それを聞いて、ソジは笑って言った。

「問題ないさ。……別に、行きたくないならいいけど」

ソジは、気が変わるのが早い。やつぱり来るな、なんて言われるまえに、返事をしなければいけない。

ミヤはそう思い、慌てて言った。

「い、行きたいです！」

すると、ソジは満足そうに微笑んだ。

翌日、ミヤは再び鳴滝川のある山へと入っていった。

けれど、どんなに川辺を歩いていても、とうとうギンは現れなかった。

やがて日が沈みはじめると、ミヤは適当に辺りに茂っていた背の低い木から青い葉を一枚もぎとり、葉の裏に爪で文字を書いていった。そして葉がぎっしり文字で埋まると、目立つ岩のうえに風で飛

ばないように、石を重ねて置いた。

（気づいてくれるといいな）

そう思いながら、ミヤは足早にオウキの待つ家へと帰っていった。

「どうして鳴滝川へは行っちゃいけないの？」

寝床で横になりながら、隣でいまにも寝息をたててしまいそうなオウキに、ミヤは聞いてみた。

オウキはすこしうなると、目を閉じたまま言った。

「あの川にはな、……だよ」

「え？」

よく聞きとれなくて、ミヤは聞きかえした。

「なに？ おじいちゃん」

すると、オウキはまたも聞きとりづらく言った。

「……喰らうんだ……」

（喰らう？）

「なにを？」

ミヤはそう聞きかえしたが、オウキの言葉は返ってくることなく、やがて静かな寝息が隣から聞こえてきた。

（なにが、なにを喰らうんだろう）

オウキの寝息を聞きながらそんなことを考えていると、次第にオウキの寝息は遠ざかり、ミヤは深い眠りに落ちていった。

ミヤが鳴滝川を去っていったあと、岩のうえに残されていた青い葉を、興味深そうに見る一つの影があった。

一字一字丁寧に刻まれたその文は、ギンへ充てたものだった。

——ギンへ

友だちと王都の

誕生式に行ってください

見たら声かけてね

ミ
ヤ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8632y/>

鳴ノ海の物語

2011年12月2日15時50分発行